

日本ラカン協会 秋のワークショップ

現代ラカン派精神分析における身体

日時：2023年10月1日（日）17:00～19:00

場所：オンライン

参加費：無料

提題者：エレヌ・ボノー氏（精神分析家、Ecole de la Cause freudienne 会員）

ディスカッサント：阿部又一郎会員（精神科医、伊敷病院）、森綾子会員（臨床心理士、護国寺こころの森相談室）、ソフィー・ラック氏（臨床心理士/精神分析家、ソルボンヌ大学予防医学施設心理士）

司会：福田大輔理事（青山学院大学）

昨今、技術の発展により、身体について多くが語られている。アンチ・エイジングや美容整形、有名人や国際的なスポーツ選手のタトゥー、性別違和による解剖学的な性の越境、ゲームやインターネットへの^{アディクション}嗜癖、摂食障害、病や老化、認知症やフレイルなど、解剖学的身体とその心的構造への影響について、多くのひとが興味を抱いていると思われる。

精神分析はどのように身体を扱ってきたかと振り返ると、フロイトのナルシシズムからラカンの鏡像段階まで、身体像に関わる^{イマジネール}想像的な次元においては多くの頁が費やされてきたことがわかる。また、リビドーや性的享楽に関わる身体的表象についても言及されてきた。しかし、近年急速に注目されているのは、かならずしも性的とは限らない身体、もしくは抑圧のメカニズムにより性愛化されていない身体ではないか。性と意味の領域の外部にある享楽については、ラカンとその流派に属する精神分析家たちも1970年代まで明白な仕方では語る事がなかったと言わざるを得ない。

精神分析での自閉症臨床では、自閉症者の身体と言葉についてよりも、分析家自身の身体と言葉について問われる。これまで問われなかった特殊な転移における分析家の現前が要求され、無意識の形成物の解釈には還元されない言語操作が必要とされる。今回のワークショップでは自閉症臨床こそ扱わないが、現代ラカン派の分析家の言語と身体の使用を学ぶことで、現代における新しい解釈のあり方を把握することを目的としたい。

今回のWSの提題者には、フロイト大義派（Ecole de la Cause freudienne）会員のエレヌ・ボノー氏にご登壇いただく。中断もはさんで40年ほどにわたる彼女自身の三度の精神分析の経験のなかで幾度も〈身体の出来事〉が反復していたり、病におかされたりした経験からも精神分析家としてのあり方に影響を受けた方であり、身体についての現代の潮流も踏まえた臨床の提題者としてうってつけである。

蛇足になるかもしれないが、1990年代までのラカン派精神分析は、シニフィアンの連鎖と無意識の主体を強調した、象徴界優位の臨床を展開していた。そこでは、ヒステリー・強迫神経症・恐怖症など、性的欲望の抑圧が問題になる神経症がターゲットであった。こうした臨床にたいしては、ラカンの生前から、情動や身体が扱われていないという批判が出てい

たが、ボノー氏はそうした現場を実際に経験して、日本で「ラカン派」として知られる臨床とは異なる臨床を実践しているため、多くの聴衆にも得られるところは大きいと思われる。

今回のWSで取り上げる症例は、彼女の著作『言葉にとらわれた身体』（本年9月下旬に誠信書房から刊行予定）に掲載されている。8歳からポルノ鑑賞をし、15歳での窓からの飛び降り企図を契機としてボノー氏に精神分析を受け始める。そのあと、数年の中断期間をはさんだあと、彼女の性的欲望の欠如からパートナーと離別したことをきっかけに抑うつ状態になり、再度ボノー氏に精神分析を受けた20代の女性である（第4章 イレーヌ事例）。ボノー氏の著作の内容をよりよく理解するため、本協会会員の阿部又一郎氏、森綾子氏、さらにはパリで臨床心理士・精神分析家として活躍しているソフィー・ラック氏にもご登壇いただき、ボノー氏に具体的な質問をしていただく。その後、ワークショップ参加者との質疑応答を通して、さらに現代ラカン派臨床の核心に触れることができると考えている。